

4. 日本へのアメリカンフットボールの流入と東京高等師範学校

熊澤 拓也（大学院社会学研究科 博士後期課程）

はじめに

日本では、協会や連盟等が初めて結成され、初の公式戦が行われた 1934 年をアメリカンフットボール元年とし、当時活動の中心だったポール・ラッシュ(Paul Rusch)を日本アメリカンフットボール界の父と呼んでいる¹⁾。実際には 20 世紀初頭から日本でもアメリカンフットボールの活動は行われていた。当時の活動の中心は、他の多くのスポーツと同様、東京高等師範学校の関係者であった。しかしながら、その後、東京高等師範学校の関係者は普及を推し進めず²⁾、それにより日本におけるアメリカンフットボールの活動は、他のフットボールコードを含む多くのスポーツと比較すると小規模に留まることになった。これは、野球を始め、バスケットボールやバレーボールなど、他のアメリカのスポーツや文化が日本で広く受容されたことを考えると特筆すべき点である。

本稿では 1934 年より前を日本におけるアメリカンフットボールの流入期とし、従来先行研究では触れられることのなかった流入期におけるアメリカンフットボールの活動に焦点を当てる。当時の活動の実態を明らかにするとともに、東京高等師範学校が当時、スポーツの普及において果たした役割についても検討する。なぜなら、東京高等師範学校の関係者によるスポーツ種目の「選別」がその後の普及に大きく影響したと考えられるからである。

尚、以下では「アメリカンフットボール」を「アメフト」、「東京高等師範学校」を「東京高師」と略記する。また、引用文中の旧字体は新字体に変換し、「…」は筆者による中略を示す。引用文頭の番号(①、②…)や、引用文中の下線は筆者によるものである。

先行研究の検討と本研究の方法

日本のアメフトの歴史に関する学術的な研究は管見の限り皆無である。また、流入期の歴史に関しては、協会や連盟等による刊行物やジャーナリスト的な著作を含めても、扱っているものはほとんど無い。その中で唯一、日本における流入期のアメフトの歴史を研究しているのが、川口仁を中心とした関西アメリカンフットボール協会フットボール史研究会である。同研究会の研究成果は『岡部平太 小伝 日本で最初のアメリカンフットボール紹介者 一附 改訂版 関西アメリカンフットボール史』として刊行されている³⁾。また、川口個人の研究成果は「日本アメリカンフットボール史 一フットボールとその時代一」というブログに公表されており、その内容は 2016 年初頭に『日本アメリカンフットボール史』として発行される予定である⁴⁾。本研究では、上記の研究成果を 1 次史料によって裏付けながら、筆者自身が発見した新事実や新史料も加えて、日本における流入期のアメフトの歴史を再構成していく。また、川口が聞き取りで得た情報や一般には未公開の情報など、1 次史料による裏付けが困難ないし不可能な箇所については、川口らの研究成果に依拠することにしたい。

一方、日本のスポーツ黎明期において東京高師が果たした役割に関する先行研究については一定の蓄積がある。寶學他⁵⁾、清原他⁶⁾、大熊他⁷⁾、真田⁸⁾による諸研究は東京高師がスポーツの「導入」と「普及」の 2 つの面で大きな役割を果たしたことを明らかにしている。スポーツの「導入」に関して、東京高師は、その前身の体操伝習所の伝統を引き継ぎ、日本のスポーツ黎明期においても早くから多くのスポーツを取り入れ、体操や課外の

スポーツ活動において日本で最古の歴史を有している。中でも、東京高師の教授で寄宿舎の舎監を20年近く兼任した坪井玄道と、四半世紀近く東京高師の校長を務めた嘉納治五郎の影響は大きく、彼らの指導の下で1901年に結成された校友会運動部はスポーツを「導入」する際に重要な役割を担った。また、スポーツの「普及」に関しては、1915年に体育科が設置され、体操伝習所の閉鎖以来途絶えていた本格的な体操科教員の養成と体育研究が再開されたことが契機となった。そこで当時の最先端のスポーツに関する知識と技術を学んだ卒業生たちが体操教員として地方に赴任し、各地へスポーツを普及すると同時に、その地域のスポーツの発展に寄与したのである。この他にも、全国の中等学校の生徒たちを対象に開いた全国大会や、校友会運動部の部員が各地に派遣されて行われた講習会、他校との間で行われた対抗戦・定期戦、専門技術書の出版などを通して東京高師はスポーツの「普及」に寄与した。

また森川は、東京高師の卒業生が日本の様々なスポーツ統括組織において重要な役割を担ったことを明らかにし、日本のスポーツ黎明期において東京高師が果たした、スポーツの「導入」と「普及」という2つの面での役割に言及している⁹⁾。その上で、このような東京高師の「導入」と「普及」という機能が天皇制ファシズムの下では国家的イデオロギーと結び付き、東京高師はそれを率先実行する「下士官」の役割を担わざるを得なくなったと指摘している。このように東京高師を国家との関係で捉える視点は、東京高師がスポーツを「選別」する際、そのスポーツが日本人にとって、あるいは日本の学校において採用すべきか否か、あるいは採用できるか否かを1つの重要な基準としていたことにも通じるが、詳細は後述する。

以上のように、先行研究では、東京高師がスポーツの「導入」と「普及」という2つの面で大きな役割を果たしたことが指摘されてきた。それは、東京高師の関係者たちがスポーツを「導入」し「普及」する際、そのスポーツを「導入」し「普及」すべきか否か、あるいは「導入」し「普及」でき

るか否か、という観点で「導入」するスポーツを「選別」していたことを意味する。本稿では、この点に着目し、日本へのアメフトの流入と東京高師の関係を明らかにすることで、東京高師がスポーツの「選別」という役割を果たしたことを示す。

尚、以下では「選別」「導入」「普及」という言葉を次のような限定的な意味で用いる。「選別」とは、東京高師において実際の活動に基づき、そのスポーツを「導入」すべきか否か、「導入」できるか否か判断する段階を指す。「導入」とは、東京高師において、校友会運動部のような組織化された活動主体により、「普及」に繋がる継続的な活動が行われる段階を指す。「普及」とは、東京高師(の関係者)がきっかけとなって、東京高師の関係者以外の活動主体や東京高師以外の場所で、そのスポーツが行われる段階を指す。

1. 流入期以前の日本とアメフト

具体的に日本へのアメフトの流入の実態を分析する前に、本章では日本にアメフトが流入する以前の日本とアメフトの関係について概観する。

管見の限り、日本人初のアメフト選手は松方幸次郎(1865-1950年)である。彼は1884年4月にラトガース大学に留学し、1886年秋にエール大学へ編入するまで、アメフト部のフォワード(現在のラインを指すと思われる)としてプレイした¹⁰⁾。また、桑田権平(1870-1949年)も1890年から1893年のウースター工科大学在学中にクォーターバックとしてアメフトを経験した¹¹⁾。更に、大森兵蔵(1876-1913年)も1905年秋に国際YMCAトレーニング・スクールに編入し、秋学期の体育実技科目としてアメフトをプレイした¹²⁾。このように、19世紀末以降、複数の日本人留学生がアメリカでアメフトを経験していたことがわかっている。

他方で、1871年にはラトガース大学でアメフトを経験した、ウィリアム・エリオット・グリフィス(William Elliot Griffis)が¹³⁾、1905年にはアメフトに精通したYMCA主事のジョン・マーレ・デイビス(John Merle Davis)が来日しており、日

本人留学生がアメリカでアメフトを経験していたのと同時期に、アメリカでアメフトを経験した複数の外国人指導者が日本にいたこともわかっている¹⁴⁾。

次章以降で分析する通り、このような日本人留学生や外国人指導者の往来が、日本にアメフトが流入する契機となったのである。

2. 中村覚之助ら東京高師フットボール部の活動 (1902 年)

1902 年 4 月、東京高師の中村覚之助(1878-1906 年)は『アソシエーションフットボール』を翻訳し、フットボール部(以下「サッカー部」)を立ち上げ、9 名の新入部員と共に活動を始めた¹⁵⁾。当時の様子は以下のように書かれている。

①米国の^(ママ)フットボールに付ては、此年の春、合衆国のウイスコンシン大学に遊学して居る坂上某氏(保三：筆者注)が帰朝した時、其大体を聞き得たから、此所に其状況を^(ママ)するさう。同氏は、なかなかの運動家で、特に、此のフットボールは、最も得意であるから、今日では、同大学のフットボールの助教をして居るそう。...前に述べた、坂上氏が米国から、一時帰朝して居るとのことだから、速早、氏を聘して、三時間計りフットボールの蹴方や、ゲームの仕方などの説明を聞き、夫れで、充分、会得出来ないから、運動場で実に、其の仕方を示して貰つたのである。此時出席したものは、何んでも、四十人計りあつたかと思ふ。夫れから、時々、其方法で練習をしたが、...然して、坂上氏より教授を受けたのは、即ち、云はば、ラグビー式であつて、随分、激烈であるから、喧嘩すきは、日本人には、其の儘、実行することが余程むづかしいので、多少、取捨改良を要するので、委員間で彼れ是れ協議をしたが、一遊戯を改良すると云ふことは、なかなか、困難な事業であるから、別に、名案も出なかつたが、幸に、先年、洋行

せられた、坪井先生が此度帰朝せられたから、直ちに先生に相談した、ところが、先生も亦ラグビー式が余り過激であるからアソシエーション式の方が、日本人に適當である、と云ふ考へで、且つ、先生が持ち帰られた、最も適切なる書物を示されたから、此度は、愈々其方式で行^(ママ)ることに定め、書物でわからぬ所は先生の説明を承はることにした¹⁶⁾。

上記の引用文からは、1902 年 4 月、東京高師において中村らサッカー部員を含めた約 40 名の生徒が、当時一時帰国していた坂上保三(生没年不明)の指導の下、アメフトの練習をしたことがわかる¹⁷⁾。坂上はアメリカのウイスコンシン大学アメフト部で助教(現在のアシスタントコーチを指すと思われる)を務めていた人物である。また、その後数ヶ月間は活動を継続したが、アメフトの激しさ故、日本人にはサッカーの方が適しているという理由で、その活動が終わったことも読み取れる。この活動は練習のみで終わったが、管見の限り、日本で初めてアメフトが行われた事例である。

では、そもそもなぜ中村らはフットボールに着目したのだろうか。この点について中村らは以下のように述べている。

②柔道や、撃剣や、久しく、我が国民の精神と身体とも練磨^(ママ)し来たもので、今後も益盛んにすべきものである。ダムベルや、ホワイトレーは、近来、我が国に行れ出したのもので、筋骨練磨の具としては、各、価値あるものである。...又ベースボールや、ローンテニスは、...共同的^(ママ)造^(ママ)戯の一で、ボートレースの如きも亦然りで、之れ等は、皆、学校遊戯運動の種類としては、大いに、可なるものである。然し、フットボールに至つては...共同一致の働きを要するものであるから...共同的、団体的、精神を養成する為めの遊戯として、大いに、我が国の諸学校に、此遊戯を盛んにしようと思ふ所以である

③フットボールなる遊戯が...他の、あらい、遊戯に比して、...吾人が足部の發育を増進せしむるために、大いに、此の遊戯の盛んになるを欲する所以である。

④経費上、最も経済的なものは此のフットボールである。僅かに一個のボールを以て、三十の人間が同時に、愉快に、活動することの出来る...其の運動甚だ活発であるから、短時間で充分に筋骨の練磨と、精神上の愉快とが得らるるから、即ち又、時間上にも経済の遊戯である。之れ、吾人が為すべき仕事の多くて、運動する時間の少ないことを感ずる、学生生徒の遊戯として大いに、盛んにせんと欲するわけである¹⁸⁾。

②③④の引用文では、当時盛んに行われていた柔剣道やダンベルトレーニング、野球、テニス、ボートなど、他のスポーツと比較してフットボールを行うべき理由が3点、挙げられている¹⁹⁾。1点目はチームスポーツであるため、共同的・団体的精神を身に付けられること、2点目は主に足を使うため、他のスポーツでは鍛えづらい下半身を鍛えられること、3点目は、1つのボールで1度に大人数がプレイでき、短時間で激しく動くため、金銭的にも時間的にも効率的に体を鍛え、楽しむことである。これらを総じて、フットボールは体育的効用が高く、スポーツとして「導入」すべき、と判断されたのである²⁰⁾。

しかし、ここで注意すべきは、上に挙げた4つの引用のうち、①の「フットボール」という言葉はアメフトを指しているが、②③④ではサッカーやラグビー、アメフトを含めた広い意味でのフットボールコード全体を指しているということである。このような違いは当時の人々のフットボールコード認識に起因するものであり、同時にそれは、サッカー部の部員である中村らがアメフトを行った理由にも通じる。では、当時の人々のフットボールコード認識とはどのようなものだったか。その点については以下のように書かれている。

⑤フットボールと云ふ遊戯は...ラグビー流と、アツソシエーション流、との二派に分れ...米国のは純粹のラグビー式でもなければ、アツソシエーション式でもなく、...ラグビ流を骨子として、多少、亜米利加化したものである²¹⁾

⑥従来、實地に、外国のフットボール会に加わつて充分練習の出来た人が、實地に、之れを我国人に伝え、我が国人を指導することがなく...決して、眞のフットボールが、わかる筈がない。況んや、此の遊戯が、あらゆる、遊戯中で...最も、複雑なものである...。之れを、一度も球を蹴た事のない人が、翻訳した書物で以て、我国人に会得せしめるやう^(ママ)ては、余程、無理な注文にちがいない²²⁾。

上記⑤より、当時のフットボールコード認識では、「フットボール」がまずアソシエーション式とラグビー式に分かれ、ラグビー式は更に英国流と米国流に分かれるとされている。つまり、当時「アソシエーション式フットボール」と考えられていたものが現在のサッカーに、「英国流ラグビー式フットボール」がラグビーに、「米国流ラグビー式フットボール」がアメフトに相当するのであり、この点では当時既にサッカー、ラグビー、アメフトという現在と同様の3つのフットボールコードが明快に区別して認識されていたことがわかる。

しかしながら、⑥からは、フットボールコードが3つに分かれることは認識されていた反面、複雑な「フットボール」を本場で経験した指導者や、そのような経験者によって書かれた専門技術書が不足しているため²³⁾、3種類それぞれのフットボールが実際にどのようなものか理解できるはずがないとされている。そのため中村ら東京高師サッカー部は、アメリカのフットボールがどのようなものを学ぶため坂上に指導を頼んだと思われる。

このようなフットボールコードの認識については、当時のスポーツ用品店のカタログや新聞記事、坂上の講演録²⁴⁾、後述する岡部平太や牧野正巳の回想録²⁵⁾など多くの史料に見受けられる。以下で

はその内、スポーツ用品店のカタログと新聞記事を見ることにする。

美満津商店は、1882年5月に東京で創業した、戦前日本のスポーツ用品業界の中心的存在である。同商店の1902年のカタログでは「フットボール」のボールの取り扱いが確認できる²⁶⁾。項目名は、「フットボール」の中に「アソシエーション流ボール」と「ラグビー流ボール」があり、「ラグビー流ボール」の中に更に「英国製ボール」と「米国製ボール」がある。ここからも「フットボール」がアソシエーション式とラグビー式に分かれ、ラグビー式は更に英国流と米国流に分かれる、という認識であったことが窺える²⁷⁾。

また、1906年の『読売新聞』には慶應義塾大学ラグビー部の選手だった櫛山次郎が「ラグビー式フットボールの特質に就て」という見出しで以下のような記事を投稿している。

フットボールは是れを「アソシエーション」式と「ラグビー」式との二つに区別することが出来る...「ラグビー」式は又此を英国式と米国式との二個に区分することが出来て...²⁸⁾

上の記事でも、先述のように「フットボール」をアソシエーション式とラグビー式に分け、更にラグビー式を英国式と米国式に分けるというフットボールコード認識が示されている。

本章を総括すると、東京高師において「我国学校の遊戯として不適當のものであるか」²⁹⁾という観点からサッカーやラグビー、アメフトを含めたフットボールコード全体を捉えた場合、そこには体育的効用が認められ「導入」に値すると判断された。その結果、中村ら東京高師サッカー部は活動を始めたが、当時のフットボールコード認識を背景に彼らはアメフトを行うことになった。しかし、アメフトは激し過ぎて日本人には適さないという理由で活動は中断され、より日本人に適するとされたサッカーを行うことになった。ここで重要なのは、スポーツを「選別」する際の基準が、東京高師サッカー部にとってそのスポーツを行う

ことが有用か否か、あるいは危険か否かというよりも、日本人にとって、あるいは日本の学校においてそのスポーツが有用か否か、あるいは危険か否かであったということである。この過程で、サッカーは「導入」すべき、アメフトは「導入」すべきでない、あるいは「導入」できないという「選別」がなされたのである。

3. 岡部平太を中心に行われたアメフトの活動(1920,1921年)

前章で「選別」された結果「導入」されなかったアメフトだが、その後も「導入」の契機はあった。以下では、岡部平太によって、前章より活発で発展的な活動が行われたにもかかわらず、結果的に前章と同様、「選別」の結果「導入」に至らなかった例を取り上げる。

1917年6月から1920年1月まで嘉納の斡旋でアメリカに留学していた岡部平太(1891-1966年)は1917年と1919年の秋にシカゴ大学でアメフトをプレイした³⁰⁾。岡部は帰国後、母校である東京高師の体育講師と東京帝国大学(以下「東大」)経済学部、農学部の陸上部のコーチ、第一高等学校(以下「一高」)の陸上運動部のコーチに就任した³¹⁾。また、岡部は東京高師の第七寮という、主に体操専修科の生徒たちが入っていた寄宿舎に身を寄せた³²⁾。東京高師とその附属中学校(以下「附属中」)のグラウンドは共用だったので、岡部は附属中の4年生の有志にアメフトの手ほどきをし、主に陸上部員が中心の同好会的なチームを作った³³⁾。岡部がアメリカから持ち帰ったボールが使われ、防具は柔道着が当てられたが、ヘルメットやヘッドマスクが準備できないという事情から、実際は両手でタッチすればタックルの代わりになるというタッチフットボールのような形式で行われた³⁴⁾。

彼らは当時まだ主たる攻撃のプレイではなかったパスも左右のエンドに投げ、リバース・プレイ、エンド・ラン、フィールドゴールも行った³⁵⁾。さらには、丸善でスポルディング社のスポーツ叢書の1つとして出版されていた *How to Play*

Football を入手し、フォーメーションなども研究した³⁶⁾。これらのプレイやフォーメーションなどは現在のアメフトにも通じる部分がある。彼らの試合相手は、附属中の 5 年生や東京高師の生徒などで作る上級生チームと、一高陸上運動部が中心のチーム、L・ジェンヌというチームの 3 チームであった³⁷⁾。L・ジェンヌは岡部が指導した東大経済学部、農学部、陸上部有志が集まったバスケットボールクラブで、当時国内最高峰といわれた東京 YMCA チームに挑戦すべく活動していたが、アメリカのスポーツのシーズン制という岡部の考え方に従い、秋にアメフトをプレイし、冬にバスケットボールをプレイした³⁸⁾。上級生チーム、一高陸上運動部チーム、L・ジェンヌと対戦した附属中 4 年生中心のアメフト同好会は、岡部からいち早く指導を受け、戦術も優れていたため、いずれの試合にも勝利した³⁹⁾。

しかし、1921 年 4 月、岡部の転勤に伴い、教え子たちによるアメフトの活動は 1 年足らずで終わった。そのきっかけとなったのは、東京高師在学中の学費やアメリカ留学中の費用など、岡部を長年にわたって経済的に援助した実業家の内田信也(1880-1971 年)が水戸高等学校(以下「水高」)を創立したことにある⁴⁰⁾。内田は岡部に同校の体育講師兼コーチに就任するよう依頼し、岡部がこれを受けたため、岡部は東京高師を去り、附属中におけるアメフトの活動は、岡部が持ち帰った 3 個の楕円球が潰れて使えなくなると共に終わったのである⁴¹⁾。当時は国内にボールの製造メーカーが無く、輸入する方法も限られていたため、活動の継続が困難だった⁴²⁾。岡部は当時の活動について、後に以下のように振り返っている。

アメリカで一番よくやったのはアメリカンフットボールで...日本で一番やりたかったのはやはりフットボールだった。ボールだけは持って帰って来ていたので、^(ママ) 附属中学と本校と共有の運動場でやり出したが、運動場が砂利でタックルできず、相手の学校もなく、一時は英国式ラグビーに転向して見たがうま

く育たなかった。勿論アメリカで私がフットボールをやったのはそれを日本に持って帰るなどというのではなく、これがアメリカ学生の代表的スポーツだったから、自分も元気いっぱいの時ではあるし、アメリカ学生などに負けるものかと思い、その上^{だい}大コーチ、スタッグ(留学中の恩師：筆者注)の人間性に魅了されてしまって無我夢中にやったという次第だ。しかしいずれにも執着はなかった⁴³⁾。

私は米国に居る間...シーズンになればフットボールばかりやつて居た。然し(日本に：筆者注)帰つて来てからはフットボール(アメフト：筆者注)の技術に就いては何んにも日本に紹介しなかった。それは日本の普通の人には危険であると思つたからである。私自身は少しも危険と思はないが外の人が怪我してはならぬと思つたからである。実際運動競技の中で一番私に適してゐるものは蹴球だと言ふことを私はよく知つてゐる⁴⁴⁾。

上記の引用文より、岡部は、アメフトが自分に最も向いていて、アメリカで最もプレイしたスポーツであり、日本で最も教えたいスポーツだったが、日本人には危険すぎるため、自分の教え子の有志を除き、体育や運動部活動としてアメフトを紹介することはせず、そのことに執着もなかったことが読み取れる。

本章の事例では、東京高師において複数のチーム間で試合が行われるなど、アメフトの活動という点では発展が見られ、アメフトが「導入」される契機はあったものの、岡部がアメフトは日本人にとって危険すぎると判断したことや、用具の入手が困難だったことから、アメフトは「導入」すべきでない、あるいは「導入」できないとして「選別」されたのである。ここで注目すべきは、前章と同様に本章でも、アメフトは危険すぎるものが「導入」しない理由になっていること、また、その基準が岡部本人にとってではなく、日本人にとってという視点から考えられていたことである。

4. 東京高師内フットボール研究会の活動 (1927 年)

続いて、1927 年に東京高師のラグビー部員が半年間、アメフトの活動を行うことで「導入」の契機が見られた。以下では、その際の「選別」の過程を分析する。

1926 年末、大正天皇の崩御に伴い予定されていた東京高師ラグビー部の試合が中止になった⁴⁵⁾。翌 1927 年初め、「東京に於てかの米国イリノイ大学の名選手グレンージの活動写真(『誉の一蹴』：筆者注)が開封されたので(東京：筆者注)高師のラグビー部員は痛切に刺激され」喪が明けるまでの期間、アメフトも研究することにした⁴⁶⁾。これは「大谷高師教授も米国シカゴ大学で経験もあるに依つて大いに此に同意且援助し又安川先生其の他の諸氏の努力に依つて具体的になつた事」だった⁴⁷⁾。1 月 22 日より練習を始め、鈴木時太郎が「米領布哇大学でフットボールの選手であつて又米大陸留学中スポーツに興味を持つて居た関係上此の度高師のアメリカン、フットボール、チームを指導する栄を賜つた...」⁴⁸⁾。数ヶ月の練習の後、「四月三十日...吉祥寺の成蹊学園(以下「成蹊」)のグラウンドに...試合を行ひ、大成功裡に終了した」⁴⁹⁾。防具も用意され、試合はラグビー部内の紅白戦のような形で行われた⁵⁰⁾。成蹊で行われたのは芝生のグラウンドがあったからである⁵¹⁾。この試合の成功を踏まえ、6 月 25 日、アメリカのテキストを翻訳・編集して、日本初のアメフト専門技術書『アメリカンフットボール』が出版された。「本小冊子は、英文のルール、ブックを手に入れ得ない人のために、高師のラグビー部員殊に竹内(一：筆者注)、園部、塩崎(光蔵：筆者注)、佐々(亮：筆者注)、小林等の諸君が主となつて訳補してくれたものである」⁵²⁾。本書にはフットボールの一般的規則やプレイ方法、1925 年のスポルティング社のルールブックの註解付き抄訳、初心者への練習上の諸注意などが収録された⁵³⁾。また、本書では随所でアメフトの体育的効用が挙げられている。以下にその例を示す。

アメリカンフットボールは、恐らく団体競技中で、最も組織的のものであり、最も男性的のものであつて...ただ、このゲームは猛烈であつて、設備の整つた運動場の少ない日本では、何処でも行ふことが出来ないために、今日まで採用されずに居たが、現今では、運動場の設備も次第に整つて来たし、青年が進んで愛好する傾向があるのであるから、グラウンドを作つてでも、青年学生に薦めたいゲームと信じてゐる。...フットボール本来の精神を忘却する事なく、更にこれを日本化し...日本青年の心身鍛錬の好伴侶たらしめられん事を希望して筆を置く⁵⁴⁾。

吾等は、米国青年に亜米利加魂を鼓吹してゐるこのフットボールを日本運動界に採用して、吾が国青年の大和魂練磨の一助に資する抱負の下に起つたのである⁵⁵⁾。

私の信ずる体育上の価値観に於て、本ゲームが最もその効果あるものである⁵⁶⁾

本事例は、アメリカ映画をきっかけに、東京高師ラグビー部の有志によるフットボール研究会(以下「アメフト研究会」)が半年間アメフトを体験し、日本初のアメフトの専門技術書を刊行することを通じて、じっくりとアメフトを「選別」した過程であるといえる。その結果、アメフトは、団体精神や男性性、大和魂、身体の涵養と鍛錬に有用であるとされ、高い体育的効用が認められた。一方、坪井や岡部らによって指摘されていたアメフトの危険性については、運動場の設備が整ってきたことなどから、もはや大きな問題ではないとされた。これらを総じて、アメフトは、日本人にとって、あるいは日本の学校において採用されるべきと評価されたのである。このような評価にもかかわらず、いくつかの理由から東京高師ラグビー部はアメフトを「導入」しなかったが⁵⁷⁾、後述する安川の活動など「普及」の兆しは見えたと見える。ここで重要な点は、アメフト研究会におい

ても、日本人にとって、あるいは日本の学校においてアメフトを採用すべきか否か、採用できるか否かという点が「選別」の基準であったことである。

おわりに

以上、本稿では、日本へのアメフトの流入と東京高師との関係性という視点から、流入期のアメフトの活動の実態を検討してきたが、その結果、東京高師は、スポーツの「導入」と「普及」という、先行研究が指摘してきた役割に加え、「選別」という役割を果たしたことが明らかになった。また、東京高師が、そのスポーツを「導入」すべきか否か、できるか否かを判断する際に、日本人にとって、あるいは日本の学校において採用すべきか否か、採用できるか否か、という視点が重要な基準になっていたことも明らかになった。

その後、東京高師内アメフト研究会の塩崎と同級生だった橋本順治が、1929年11月から1931年8月まで体育教員として県立和歌山中学校に在籍した際、1929年と1930年の一方または両方の冬に授業でアメフトを行った事例⁵⁸⁾や、岡部の教え子たちが附属中を卒業後、進学先の東京高師や水高でラグビー部を創部し、ラグビーの傍らアメフトを行った事例⁵⁹⁾、東京高師内アメフト研究会の安川がタッチフットボールに似たアメフトの簡易版を考案し、中等学校で行った事例⁶⁰⁾、横浜高等工業学校でアメフトが行われた事例⁶¹⁾などがある。これらの事例の多くは東京高師の関係者がアメフトを「普及」した事例にあたるが、継続的に組織だっで行われたものではなく、いずれもアメフトの受容に十分な役割は果たさなかった。

1934年以降のアメフトの活動実態を鑑みると、この後、活動の中心は東京高師から私立大学の日系二世留学生に移ることで、アメフトは日本において特徴的な普及の過程を辿ることになるが、その検討は、「選別」の結果「導入」されなかったアメフト以外のスポーツの普及において東京高師が果たした役割の検討とともに今後の課題としたい。

【注】

- 1) 例えば、井尻俊之・白石孝次『1934 フットボール元年 父ポール・ラッシュの真実』(ベースボール・マガジン社、1994年)、3-4頁。
- 2) ちなみに東京高等師範学校にアメリカンフットボール部が創られるのは1977年の筑波大学のときである。
- 3) 川口仁『岡部平太 小伝 日本で最初のアメリカンフットボール紹介者 一附 改訂版 関西アメリカンフットボール史一』(関西アメリカンフットボール協会フットボール史研究会、2004年)。
- 4) 川口仁「#43 3200万円のブランドとニューヨーク市長」
<http://kawaguchi-kgfighters.sblo.jp/article/62695037.html>『日本アメリカンフットボール史 一フットボールとその時代一』
<http://kawaguchi-kgfighters.sblo.jp/>、2013年2月19日公開。
- 5) 寶學淳郎、清原泰治、阿部生雄「東京高等師範学校の課外スポーツに関する歴史的研究(I) 一明治期を中心として一」『高知学園短期大学紀要』第28号(高知学園短期大学、1998年)、9-22頁。
- 6) 清原泰治、寶學淳郎、阿部生雄「東京高等師範学校の課外スポーツに関する歴史的研究(II) 一大正期から昭和戦前期を中心にして一」同上書、23-32頁。
- 7) 大熊廣明・阿部生雄・真田久・岡出美則・長谷川悦示「高等師範学校・東京高等師範学校による学校体育の近代化とスポーツの普及に関する研究」『筑波大学体育科学系紀要』第28巻(筑波大学、2005年)、157-173頁。
- 8) 真田久「東京高等師範学校と嘉納治五郎 大学スポーツのかたちをつくった時代」『現代スポーツ評論』第14号(創文企画、2006年)、107-114頁。
- 9) 森川貞夫「東京高師と日本のスポーツ」『スポーツ社会学研究』第8巻(日本スポーツ社会学会、2000年)、24-49頁。
- 10) 神戸新聞社編『火輪の海 一松方幸次郎とその時代一 復刻版[新装]』(神戸新聞総合出版センター、2012年)、95,107-108,114,117-119頁。
- 11) 桑田権平『自伝(1870-1949) 一七十五年間の思出の記一』(協和出版、1958年)、43頁。市川新「日本人最初のフットボール選手」『タッチダウン月刊アメリカンフットボールマガジン』2012年5月号 No. 514(タッチダウン株式会社、2012年4月)、52-53頁。
- 12) 水谷豊『白夜のオリンピック 一幻の大森兵蔵をもとめて一』(平凡社、1986年)、48,50頁。水谷豊『バスケットボール物語 誕生と発展の系譜』

(大修館書店、2011 年)、106-107 頁。

13) 高木不二「黎明期の日本人米国留学生 一日下部太郎をめぐる」『大妻女子大学紀要 文系』第 37 巻(大妻女子大学、2005 年 3 月)、240 頁。
アーダス・バークス「西洋から日本へ お雇い外国人」アーダス・バークス編/梅溪昇監訳『近代化の推進者たち 留学生・お雇い外国人と明治』(思文閣出版、1990 年)、190 頁。川口仁「#19 フットボール伝来記 4 - 焼失した日記 -」

<http://kawaguchi-kgfighters.sblo.jp/archives/200810-1.html>、前掲ブログ、2008 年 10 月 1 日公開。

14) 水谷豊、前掲書、(2011 年)、118 頁。

15) 『アソシエーションフットボール』の原本は以下の 4 冊であるが、それぞれ、出版社、出版地、出版年、著者などが不明なものも含まれている。①Charles G. B. Marriott and C. W. Slcoock, *Foot Ball*. ②C.W.Slcoock, *Association Foot ball*. ③John Coodall, *Association Foot ball*. ④*Foot ball Who's Who*. 東京高等師範学校フットボール部編「凡例」『アソシエーションフットボール』(鍾美堂、1903 年)、1-2 頁。

実際には中村以前にフットボール部は創部されていたが、「従来は、只、名ばかりで、殆んど、睡眠の状態、幾年も経過したのであ」った。東京高等師範学校校友会編『校友会誌』第 2 号(東京高等師範学校校友会、1902 年 12 月)、114 頁。

また、9 名の新入部員とは、1 年の堀桑吉ら 8 名と 2 年の塩津環である。堀桑吉「サッカー(ア式蹴球)草創のころ」『茗溪』882 号(茗溪会、1967 年 1 月 10 日)、13 頁。

東京高等師範学校校友会編「故中村覚之助君を想う。」『校友会誌』第 11 号(東京高等師範学校校友会、1906 年)、118-119 頁。美間正道「蹴球部史」東京高等師範学校校友会編『本校創立四十年記念 校友会発展史』第 29 号(東京高等師範学校校友会、1911 年)、117 頁。

16) 東京高等師範学校校友会編、前掲書、(1902 年)、112-114 頁。

17) 引用文中では「ラグビー式」となっているが、後述の通り、当時のフットボールコードではラグビー式の中にラグビーとアメフトが含まれており、坂上がアメフトの経験者だったことなどからも、ここではアメフトを指すと思われる。坂上保三「米国内式『フットボール』」『体育』第 105,106,107 号(日本体育会、1902 年 8,9,10 月)。

18) 東京高等師範学校校友会編、前掲書、(1902 年)、112-113 頁。

19) 同上。

20) 高津は、欧米文化としての(サッカー、ラグビー、アメフトを含む)フットボールへの憧れという文化的な視点から、フットボールへの価値づけが行われた点を指摘している。本事例においても、

そのような欧米文化への憧れがフットボールの実践に影響したと思われる記述があるが、詳細な検討は別稿に譲る。高津勝「欧米近代スポーツと民衆」中村敏雄編『スポーツの伝播・普及』(創文企画、1993 年)、118-119 頁。

21) 東京高等師範学校校友会編、前掲書、(1902 年)、111 頁。

22) 同上書、113-114 頁。

23) 日本におけるアメフトの専門技術書の不足については坂上も指摘している。坂上保三、前掲記事、(1902 年 8 月)、15 頁。

24) 同上記事。

25) 岡部平太『スポーツ行脚』(日本評論社、1931 年)、34 頁。牧野正巳「大正中期の附属 主としてスポーツについて」「桐陰」刊行委員会編『記念誌 桐陰 桐華倶楽部六百回記念 母校附属中・高等学校創立百周年記念』(「桐陰」刊行委員会、1984 年)、125 頁。

26) 中嶋健「20 世紀初頭の『美満津商店』商品カタログに見る日本のスポーツ用品産業」2012 年日本体育学会第 63 回大会体育史分科会シンポジウム「日本におけるスポーツ用品製造・販売業の変遷」発表資料(2012 年 8 月 22 日)。

27) 種類は 3 種類、価格は 5-6 円であった。現在の価格で 44,000-52,800 円である。ちなみに、このボールが実際にどれほど売れたか、単に取り扱いが可能であることを示すだけなのか、詳細は明らかでない。そのため、カタログにボールの取り扱いがあることのみを根拠に、1902 年より前の日本で既に誰かがアメフトを行っていたと指摘することは難しい。当時の美満津商店のカタログは、まだ日本で行われていないスポーツの用具を先進的に取り扱い、そのスポーツを紹介する役割も担っていたため、このカタログはアメフトに関しても同様の役割を担っていたのではないと思われる。

28) 櫛山生「ラグビー式フットボールの特質に就て」『読売新聞』朝刊 3 面、1906 年 10 月 17 日。

29) 東京高等師範学校校友会編、前掲書、(1902 年)、112 頁。

30) 厨義弘「『日本スポーツ界の鬼才 岡部平太研究』—その生涯とスポーツ近代化への貢献」『国際文化研究所論叢』第 14 巻(筑紫女学園大学・短期大学国際文化研究所、2003 年 8 月)、122 頁。岡部平太、前掲書、31-67,406-428 頁。四角誠一「岡部君の思い出」『スポーツ・勝負・人間 —岡部平太遺稿集—』(岡部平太遺稿集刊行会、1968 年)、330 頁。

31) 岡部平太『コーチ 50 年』(大修館書店、1960 年)、205-207 頁。

32) 川口仁、前掲書、21 頁。

33) 同上。牧野正巳、前掲記事、125 頁。このとき

のチームには、左エンドの牧野正巳、後に東京教育大学の教授から東京都知事となるバックスの美濃部亮吉などがいた。

34) 川口仁、同上。牧野正巳、同上。

35) 川口仁、同上書、21-22 頁。

36) 同上書、22 頁。

37) 同上。牧野正巳、前掲記事、125 頁。

38) 川口仁、同上書、22 頁。

39) 同上。牧野正巳、前掲記事、125 頁。

40) 岡部平太、前掲書、(1931 年)、20 頁。岡部平太、前掲書、(1960 年)、215 頁。山口昌男「スポーツの帝国(二)―岡部平太の“満州”」『「挫折」の昭和史(上)』(岩波書店、2005 年)、186 頁。川口仁、同上書、12 頁。

41) 岡部平太、同上書、(1931 年)、20 頁。岡部平太、同上書、(1960 年)、216 頁。牧野正巳、前掲記事、125 頁。川口仁、同上書、23 頁。

42) 川口仁、同上。先述の美満津商店など、いくつかの入手方法はあったかもしれないが、岡部の教え子たちがそのことを知らなかったか、知っていても高価で購入出来なかった可能性がある。

43) 岡部平太、前掲書、(1960 年)、207-208 頁。

44) 岡部平太「序文 精神を掴め」東京高等師範学校校内アメリカンフットボール研究会編『アメリカンフットボール』(目黒書店、1927 年)、5 頁。

45) 塩崎光蔵「創設の頃」東京教育大学ラグビー部・OB 会『茗溪ラグビーの五十年』(文化書房博文社、1975 年)、34 頁。

46) 鈴木時太郎「序文」東京高等師範学校校内アメリカンフットボール研究会編、前掲書、2 頁。川口仁「#27 1930 年(昭和 5 年)のフットボール ―父とフットボール―」

<http://kawaguchi-kgfighters.sblo.jp/archives/200812-1.html>、前掲ブログ、2008 年 12 月 10 日公開。

47) 鈴木時太郎、同上。

48) 同上記事、3 頁。安川伊三「創業の苦難」東京高等師範学校校内アメリカンフットボール研究会編、同上書、2 頁。

49) 安川伊三、同上。

50) 川口仁、前掲ブログ、2008 年 12 月 10 日公開。川口仁「#37 日本アメリカンフットボール創始 75 周年の記念ゲーム」

<http://kawaguchi-kgfighters.sblo.jp/archives/200907-1.html>、前掲ブログ、2009 年 7 月 3 日公開。

51) 同上。

52) 安川伊三、前掲記事、3 頁。

53) 竹内一「本書発刊の目的」東京高等師範学校校内アメリカンフットボール研究会編、同上書、5-6 頁。

54) 二宮文右衛門「序」東京高等師範学校校内アメリ

カンフットボール研究会編、同上書、2-3 頁。

55) 安川伊三、前掲記事、1-2 頁。

56) 竹内一、前掲記事、5 頁。

57) 1 つ目は、アメフトの活動を始める際、ラグビー部内が積極的な立場と消極的な立場に意見が分れていたことがある。前者は、ラグビーをやる上でアメフトを研究することは有用であり、部員の大半が将来体育の指導者になることを考えれば、アメフトぐらい理解していなければならないと主張する一方、後者は、まだラグビー部が創部して間もないため、本業のラグビー研究に集中すべきであり、他のスポーツの研究をしている暇はないと主張した。両者が議論を重ねた結果、アメフトの研究をすることにはなったが、その際、アメフトを研究する期間を定め、期限が来たら、それ以後はラグビーだけに集中することが厳格に取り決められていた。2 つ目は、アメフトの活動を始める以前、既にラグビーに体育的効用が認められ、校友会運動部としてラグビー部が創部されるなど、活動が継続される基盤が確立していたことがある。東京教育大学ラグビー部・OB 会、前掲書、86,108-109,111,170 頁。

58) 東京文理科大学「五十音別氏名原籍出身学校卒業年月及学科」『東京文理科大學 東京高等師範學校 第一臨時教員養成所 一覽 昭和四年度』(東京文理科大学、1930 年 3 月)、530 頁。東京文理科大学「卒業年月及学科別氏名並卒業後ノ状況」『東京文理科大學 東京高等師範學校 第一臨時教員養成所 一覽 昭和五年度』(東京文理科大学、1930 年 9 月)、353 頁。川口仁、前掲ブログ、2008 年 12 月 10 日公開。

59) 川口仁、前掲書、28 頁。「日本で最初の米国式フットボール戦 けふ立教球場で挙行」『読売新聞』朝刊 3 面、1933 年 12 月 25 日。

60) 川口仁、同上。

61) 『読売新聞』、前掲記事、朝刊 3 面、1933 年 12 月 25 日。